

生涯学習の計画論・施設論

東京大学大学院教育学研究科鈴木眞理助教編『生涯学習社会の社会教育』第6巻

西村美東士

大学開放実践センター教授(社会教育学)

私は本書で、「青少年教育施設の活動・経営をめぐる問題」の章を執筆した。

現在、国公立の青少年教育施設は千以上ある。徳島大学学生がとどきどき利用する国立淡路青年の家もその一つだ。

1985年の臨時教育審議会第1次答申以降、青少年教育施設はその「個性重視」の考え方に大きな影響を受けながら展開する。ここでは、団体宿泊訓練に象徴される従来のアイデンティティを、個人化傾向という時の流れとどう整合させるかということが問われる。

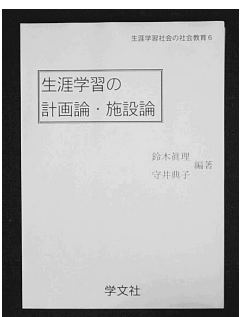
一方、青少年が引き起こす「問題」が社会を大きく揺るがすたびに、個人化を否定し、規範意識の形成等による社会化等を説く議論も蒸し返された。

このような個人化/社会化の二項対立と無限循環の問題は根が深い。個人にも深刻な影を落とす。他者との同質化というある種の社会化過程が、自己の異質性等をかなぐり捨てても実現しなければ

ならない重荷になっている。

団体宿泊訓練が目指してきたものは本質的には「個人がどのように生きていくか」であった。「他者との出会い」を通して、結果的には社会化を促すというその教育機能は、青少年およびそれを取り巻く社会が直面する個人化/社会化の二項対立を実践的に乗り越える可能性をもっている。今後の青少年教育がめざす社会、公共、対話、参画などの究極的な主体はあくまでも個人であり、その個人化は敬遠されるどころか、より望ましい社会化につながるものとして歓迎されるべきなのだ。

この本が、就職活動をしながらも「自分らしく生きたい」と願う学生や、彼らの葛藤に向き合おうとする教師の参考になればうれしい。



2003年3月発行
(学文社)
定価(本体2,400円+税)